

2023年4月の総評に代えて 高橋修宏

ごめんなさい (合川秋穂 東京都)

まだ人間と暮らしています

この作者は、いずれの作品も視点が面白い。どこか不思議な遠近感を秘めている。掲出した作では、すでに作中主体が「人間」ではないらしい。その主体の正体は明かされないまま、ポスト・ヒューマンとも呼べる気配が読者に手渡される。

汚染水が (源楓香 東京都)

コーヒーに変わる頃に

一周してしまいそうな文明

鈴木六林男の〈河の汚れ肝臓に及ぶ夏は来ぬ〉という文明批評を秘めた俳句を、どこか想起させるような作品。だが、この作では「汚染水」は浄化されて「コーヒー」に変わるのだろうか。「一周してしまいそうな文明」に、やんわりとアイロニーが漂う。

湯冷めして足下の小さな惑星 (氷丸 茨城県)

「湯冷め」という身体的な変化が、そのまま宇宙的な感覚へと接続してゆく絶妙な作品。「小さな惑星」という把握には、ヒューマンな批評性も感じる。

火のように黴の広がる鏡かな (中矢温 東京都)

まず、「火のように」と形容した鮮烈さに打たれた。燃えあがるように、一気に広がっていく「黴」の生命力をシャープに切り取っている。また「火」と「鏡」の対比も、妖しく美しい。

スクロール途中の雪崩注意報

(柰いう子 佐賀県)

作者の句は、いずれも取り合わせが上手だ。なかでも掲句は、「スクロール」という身振り
と「雪崩」が見事なほど響き合っている。鮮やかな印象の一句。

菊を

(山本先生 東京都)

踏んでしまって

一步目が

遠い

「菊」の清浄な気配や美しさと同時に、どこか象徴的なイメージ — たとえば、天皇や戦
前の日本 — さえ投げかけてくる作品だ。そのように受け取ると、結句の「遠い」という一
語も単なる物理的な距離にとどまらず、あるアレゴリーさえ感じさせる。

耳朶の産毛のように石鱗玉

(吉沢美香 宮城県)

きわめて繊細な比喩が、見事だ。ふだんは意識することのない「耳朶の産毛」。その、あえ
かな存在感が「石鱗玉」と美しく震え、共鳴している。

そうじゃない、ほうの

(こはくいろ 大阪府)

世界に行きたくて

小さなかかとを放りだす夜

もしやすると、小さな子どもが布団から「小さなかかと」を放り出しているのかもしれな
い。だが、ささやかな情景を「そうじゃない、ほうの／世界に行きたくて」と捉えた、作者
の想像力が大胆、そして見事だ。

半熟のくしゃみのような射精感 (大嶋碧月 兵庫県)
のような爆撃 (まだ続けるの?)

「半熟」、「射精感」、「爆撃」と熱量の高い言葉がつづく。だが、(まだ続けるの?)によって痛烈な批評性が生まれた。この悪態には、プーチンの軍事侵攻に対する、作者の怒りが込められているのだろうか。アクチュアルな一作。

生命線なんて最初に言ったのは (うろ仔 北海道)
誰なのだろう祈りをこめて

たしかに「生命線」という名付けには、あらためて驚かされるものがある。「祈りをこめて」の一語が、不思議な余韻をもたらす。

花冷のとなりの見える小便器 (にしざわゆうと 福井県)

「花冷」と取り合わされることで、どこか「小便器」が静謐な存在に見えてくるようだ。「となりの見える」は面白いが、やや言い過ぎかもしれない。

「あ、桜だ」 (烏谷藍 東京都)
人知れず首を吊る

かつて「桜」は、散華＝死の美学の象徴でもあった。そんなイメージを想起させながらも、あっけらかんとした印象が、現代における死の軽さを伝えるようだ。

冴返るティーカップに爪あたる音 (有野水都 東京都)

身体の繊細とも言える「爪のあたる音」を注意深く切り取っている。「冴返る」という季語によって、鮮やかなポエジーが生まれた。

犬が好き

(橋口諒介 東京都)

生まれ変わるなら

電柱がいいと思うくらいには好き

「好き」は「好き」でも、ここまで言われると〈まいった〉と思ってしまう。このマゾヒズムとも呼べる愛情には、もう何も言うことはありません(笑)。

抱きしめて

(うたた 岡山県)

抱きしめる、ほど、枯れてゆく

僕らはつぼみだっただらしいね

余りにも切ない作品だ。なかでも「抱きしめる、ほど、枯れてゆく」という表現が、この切なさという感情を際立たせながら、「つぼみだっただらしいね」への着地が鮮やかだ。